

東京第3分所（横浜球場）

笹本妙子

東京地区では最も早い時期に開設された収容所の1つで、当時の横浜球場のスタンド下に設置された。捕虜の扱いは良く、「日本一だった」と証言している捕虜もいる。

■ 所在地と歴史

1942年9月12日、横浜俘虜収容所として、横浜市中区横浜公園の横浜球場スタンド下に開設された。東京地区では、川崎俘虜収容所（のちに東京第1分所）、品川俘虜収容所（のちに東京本所）と並んで、最も早い時期に開設された収容所である。

9月15日、捕虜225名（英、加、米）が収容。

9月25日、東京俘虜収容所第2分所と改称。

11月中旬、フィリピンから移送されたアメリカ兵73名が収容。

43年8月1日、東京俘虜収容所第3分所と改称。

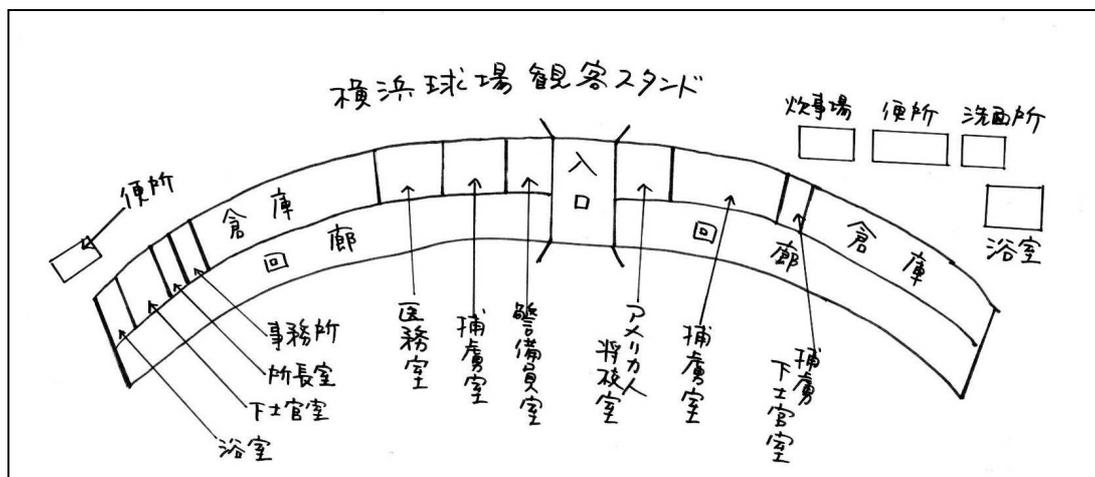
44年3月30日、捕虜102名が神奈川県橋本町に新設された第13派遣所に移送。

44年5月1日、閉鎖。捕虜は神奈川県千若町の第17派遣所（日清製油）に48名、磯子区馬場町の第18派遣所（横浜耐火煉瓦）に80名、中区山下町の第19派遣所（横浜船舶荷役）に48名が移送された。

なお、「東京第2分所」という名称は、のちに川崎市扇町の収容所の名称となり、「東京第3分所」は長野県平岡村や新潟県長岡市の収容所の名称となったため、非常に紛らわしく、一般的には「横浜収容所」または「横浜球場収容所」と呼ばれていた。

■ 居住環境

横浜球場の観客スタンド下の部屋が宿舍や事務室として使われた。居住環境は割に良かったという。



東京第3分所見取り図 (GHQ641号添付図より笹本作成)

■ 職員

分所長は開設から閉鎖まで林純勝中尉が務めた。ルイス・ブッシュ著『おかわいそうに』によれば、林中尉は長野の善光寺の僧侶だったが、大らかで人情味ある人物で、他の収容所の捕虜たちもみな彼のいる収容所に行きたがったという。彼は、42年11月より川崎扇町にあった第1分所埠頭支所（のちに第2分所）の所長を兼務、44年3月20日より神奈川区にあった第13派遣所の所長も兼務した後、44年5月からは第18派遣所と第19派遣所の所長、45年6月から終戦までは長野県北山村の第6分所（諏訪鉦山）の所長を務めた。

その他の職員についての詳細は不明である。

■ 捕虜

42年9月15日に収容された捕虜の大半は香港のシャン・シュイ・ポ収容所から移送されたイギリス兵である。彼らは輸送船「マルシ」で横浜港に到着した。その他、9名が大船収容所から移送された。

同年11月に収容されたアメリカ兵は、輸送船「鳥取丸」でマニラを10月8日に出港、11月11日に門司港に到着した。1ヶ月もの長く悲惨な航海で体力を落とした者も多かった。

最大時の捕虜総数は299名で、その内訳はイギリス兵216名、アメリカ兵76名、カナダ兵2名、民間人5名となっている。民間人はウェーキ島で捕虜になった人々である。

前任将校はカナダ空軍のバーチャル（Leonard J. Birchall）少佐。彼は輝かしい戦歴を持っている。1942年4月初旬、彼は偵察飛行艇カタリナでセイロン（現スリランカ）沖を偵察中、南雲忠一中将率いる日本艦隊が近づいてくるのをいち早く発見した。直ちにセイロンの連合軍基地に警告を発すると共に、艦隊を追跡したが、撃墜されて捕虜となった。彼の警告によってセイロンは“第2のパールハーバー”となるのを免れたことから、彼はのちに「セイロンの救世主」と呼ばれた。捕虜となった彼は、艦隊の旗艦、空母「赤城」で日本に送られ、大船収容所で尋問を受けた後、42年9月15日に横浜球場収容所に収容された。その後、第13派遣所、東京本所（大森）を経て、最後は第6分所（長野県諏訪鉦山）で終戦を迎えた。捕虜期間中に彼が秘かにつけていた日記は、戦後、戦犯裁判の証拠として使われた。彼は、セイロンの危機を救った功績と捕虜時代に仲間のために尽くした献身的行為により、数々の勲章を授与された。その後彼はカナダ軍士官学校の校長となり、空軍准将の地位で退役した。

■ 労働と日々の生活

「俘虜月報50号の2」（1942年12月15日発行）によると、42年10月時点の横浜収容所の捕虜の労働場所は、横浜港内外、日清製油、東高島駅、国光練炭、神奈川造船、日本製粉、安田倉庫、浅野ドック、芝浦電気、横浜耐火煉瓦などであった。「横浜港内

外」の労働は船の荷役作業であるが、同年12月26日、港湾運送業の戦時統制によって市内の荷役会社が統合され、「横浜船舶荷役株式会社」が設立された。これにより、捕虜たちも同社に雇用される形となった。横浜船舶荷役の取締役だった松本健太郎氏によれば、捕虜には日本人労働者と全く同じ弁当を出したので、捕虜たちは港で働くことを歓迎し、横浜に来てから体重が増えたと喜んでいたのである。捕虜には甘味品やタバコの特配が禁じられていたが、同社の作業本部長として横浜港の全船荷役を指揮していた「ミナトのおやじ」こと藤木幸太郎氏は、看守や軍人の隙をみて、彼らのポケットに飴玉やタバコをねじり込んでやると、彼らは顔中をくしゃくしゃにして喜びの表情をみせ、なかにはうっすら涙さえ浮かべ、何度も頭を下げる者もいたという。

労働時間は1日8時間(捕虜の証言では10時間)で、休日は月に2回。

仕事は楽ではなかったし、食糧や医薬品も乏しく、日本人による殴打もいくつかあったが、他の収容所に比べれば捕虜の扱いは良く、赤十字救恤品は公平に分配され、楽器や本などの娯楽品も与えられた。英軍のフォード (James A. Ford) 中尉の証言によれば、捕虜側から待遇改善の要求書が提出され、バーチャル少佐が座り込みストライキを組織したこと



横浜球場収容所の捕虜たち (W. Shilito 提供)

もあるが、所長の林中尉はこれを処罰しなかったという。戦後この収容所の調査を行ったGHQの調査官は、「相対的に言うと、この収容所は公正であった」と記しており、また、フィリピンから来たアメリカ兵、シリト (Winston Shilito) も「横浜球場収容所は多分日本一だっただろう」と語っている。シリトはのちに第18派遣所(横浜耐火煉瓦)を経て、新潟の第5分所に移送されたが、「横浜と新潟を比べると、さながら天国と地獄だった」とも述べている。

■ 医療・死者

東京の本所から週に2回、宇野医師と藤井医師が来て、捕虜を診察し、労働に適する体かどうかを決めていたが、日常の医療は米軍の軍医・カウフマン (Kauffman) 大尉が行った。

この収容所では7名(英5, 米2)が死亡している。死因のほとんどが赤痢で、このうち5名は東京第2陸軍病院に入院中であった。収容所の開設から1年ほどは、重症患者は東京第2陸軍病院に入院させられたが、43年8月1日に東京本所が品川から大森に移されると、品川の施設は「本所附属病室」(通称品川病室)となり、ここが東京地区の患者の入院先となった。死亡者が7名で済んだのは、ひとえにカウフマン軍医の献身と、捕虜将

校たちが親しい日本人職員に渡りをつけ自分たちのポケットマネーで秘かに医薬品を購入したことによると、フォード中尉は述べている。

死亡者のうちイギリス兵5名は横浜の英連邦戦死者墓地に埋葬されている。

■ 戦犯

「天国」「日本一」と言われたこの収容所でも、通訳上等兵が捕虜虐待の罪を問われて重労働1年の刑を受けている。また、所長の林純勝中尉は、第1分所埠頭支所（のちに第2分所）時代の罪で、重労働3年の判決を受けたが、その後1年に減刑された。彼の裁判の日本側弁護人は、のちに横浜市長、社会党委員長を務めた飛鳥田一男氏であった。

参考文献

- ・ GHQ/SCAP 法務局調査課報告書641号
- ・ GHQ/SCAP 法務局調査課報告書490号
- ・ GHQ/SCAP 法務局調査課報告書71号
- ・ 『大日本帝国内地俘虜収容所』茶園義男編著／不二出版／1985年
- ・ 『BC級戦犯横浜裁判資料』茶園義男編著／不二出版／1986年
- ・ 『日本港湾運送事業史』（社）日本港運協会／昭和42年
- ・ 『ミナトのおやじ 藤木幸太郎伝』白戸秀次／中央公論事業出版／昭和53年
- ・ 『おかわいそうに』ルイス・ブッシュ著／明石洋二訳／文藝春秋新社／昭和31年
- ・ 『The 13th Mission ; Prisoners of the Notorious Omori Prison in Tokyo』Robert R. Martindale／Eakin Press／1998
- ・ 『京浜地区の捕虜収容所・中間報告書』笹本妙子著／アート出版／1999年
- ・ 『捕虜収容所補給作戦 B-29部隊最後の作戦』奥住喜重・工藤洋三・福林徹著／2004年
- ・ ウェブサイト「POW研究会」<http://homepage3.nifty.com/pow-j/index.htm>
- ・ ウェブサイト「Center for Research Allied POWS Under the Japanese」
<http://www.mansell.com/pow-index.html>
- ・ ウェブサイト「Virtual Library: Ceylon's saviour」
<http://www.lankalibrary.com/geo/japan1.htm>
- ・ Winston Shilito 書簡